

第1回研究奨励賞受賞作講評

鍋島直樹著『ケインズとカレツキ——

ポスト・ケインズ派経済学の源泉』

名古屋大学出版会, 2001年

第1回経済学史学会研究奨励賞の公募推薦(締め切り2003年9月30日)に応じて提出された作品は論文3点、著書2点であった。この賞は若い世代の会員による経済学史、社会・経済思想史研究の活発化と発展に資することを目的に第66回全国大会総会(2002年10月・新潟大学)において創設が決定されたものである。この賞への応募資格(満40歳未満)を有していた会員数は締め切り時点で130名をこえていたが、推薦応募数は上記の通り5点であった。推薦を寄せていただいた会員諸氏に感謝するとともに、次回以降より多くの推薦を期待したい。応募作品はいずれも力作であり、2回に及ぶ審査委員会で慎重に審議した結果、上記作品を第1回の受賞作と決定した。

審査の過程で審査委員は、研究奨励賞の選考基準をどのようなものにすべきか、という問題に直面した。委員会内の議論は、各著作について、研究対象とした原テキストの内在的分析の妥当性、テキストの分析と自己の創見との関係、引用引証の妥当性、論理展開の一貫性や説得力、文章の明晰さ、研究史のサーベ이를踏まえたうえでの新たな貢献の有無、若い研究者を激励するという本賞の性質との関係、などについて幾度となく長時間をかけて議論を重ねた。さらに専門家の意見を聞いたうえでの判断が必要と思われる作品については、当該分野の会員専門家の知見をうかがい、それを参考にすることも行った。そうした審議を経て、上記作品の受賞が決定された。

鍋島氏の著書は、サブ・タイトルが示唆するように「ポスト・ケインズ派経済学」の重要性を、とりわけカレツキの経済理論・思想に見だし、そこを視座として「政治経済学の再生」を企図している。資本主義の長期動態分析における社会的コンフリクト・階級・権力といった政治的要因の作用を射程に収めるカレツキに共感を覚えるという視点が、基本スタンスになっている。

本書は2部構成である。第I部が「ケインズ」であり、第II部が「カレツキ」である。両者をつなぐキー・ファクターとして著者が重視するのは貨幣の役割である。ケインズは不確実性下の経済で成立する貨幣の非中立性により、非自発的失業の説明に成功したが、企業の投資決定に関して信用の利用可能性を捨象してしまったため、ケインズにとっての革命は未完に終わった。これに対しカレツキは、動学的枠組みの中で信用需要の増大に対する内生的貨幣供給は「危険逡増の原理」のもとで作用すると想定することによって資本主義が抱える不安定性を示す道筋を与え、ケインズ革命を継続させる役割を果たした。それがポスト・ケインジアンによって受け継がれているとする、『一般理論』以降に関する著者の学説史的評価が本書の著しい特色となっている。

これに関連したもう1つの特色は、著者の関心が過去の経済学よりも現在の経済学に向けられている点である。「ニュー・ケインジアン」にたいする批判的検討や、「内生的貨幣供給論」の検討、さらにはポスト・ケインズ派経済学の現

状をめぐる評価などにそれは顕著である。その意味で、本書は、経済理論・思想についてのポスト・ケインズ派の現状と将来展望を目指そうとしたものである。

以上の点は本書の長所であるが、同時に経済学史の視点からみると問題も含んでいる。それは第Ⅰ部に現出している。著者は、そこに「貨幣的生産経済の不安定性」というサブ・タイトルを冠している。だが実際には著者が共感を持ちつつ主に論じているのは、「ケインズの社会哲学」、ならびにケインズの自由と計画に関する思想の収斂たる「投資の社会化」論である。とくに投資社会化論についてはコーポラティズムの萌芽の観点から興味深い論点が提起されている。しかし経済理論との関連では、ケインズの扱いはわずかであり、「ニュー・ケインジアン」への批判的検討と「ポスト・ケインジアン」への擁護的検討が中心を占めている。『一般理論』とそれ以降に関心を寄せているとはいえ、『貨幣改革論』や『貨幣論』の検討がされていないのは、ケインズとカレツキをつなぐキー・ファクターとして貨幣の役割を重視する本書の視点を考えると残念なところである。このことはケインズ貨幣論に関する累増する最近の研究を十分に吸収することの困難さを示しているのかもしれない。

これにたいし、第Ⅱ部——本書の中核である——は、大きな長所をもっている。何よりも、それはカレツキという、言及されることはあつ

ても本格的にそれに向き合う研究が少ないなかで、希少価値を有している。そしてカレツキの経済理論をミクロ経済学とマクロ経済学、貨幣的経済理論、内生的貨幣供給理論といった視点からとらえ、その視点から他のポスト・ケインズ派の研究との統合化を目指そうとしている。そしてこの視点から、当該分野での現在の諸研究に注意を払うことで、読者に1つの鳥瞰図を提供するという価値を有している。著者のカレツキ論の随所に見られるこのバランスのとれた有益な鳥瞰は、審査委員の間でとくに高い評価を得た。

以上のように、当委員会は、本書が若い世代の研究奨励という本賞の趣旨にかなう力作であるという点で一致した意見をもった。しかしすでに上に指摘したような課題もあわせ持つ。カレツキの扱いは理論と思想の全体像をえがくことに傾注されているが、ケインズに関してはその社会哲学や思想に力点が置かれており、理論面の分析にいま少しのページ数が割かれるべきであるという印象を持つ。「ケインズとカレツキ」というタイトルにふさわしい業績として一層進化させてゆくことを期待したい。今後の筆者の、さらなる研究を期待したい。

2004年5月28日

経済学史学会
学会賞審査委員会